

アルペルートで  
北アルプス・立山

5/3~5/6

## 剣岳の周辺を滑る

メンバー L 菅沼、小森、宮、葛田、石垣  
西川、手塚

5月3日

登山者で混雑する大町駅からバスで扇沢へ向う。更にケーブルカー、バス、ロープウェイと乗継いで、さすが⑤ルートと金のかかるのに感心しながら室堂に着く。登山者やスキーヤーで賑わう中、真砂岳へ向う。シュプロールだけの雷鳥沢や、何本かのシュプロールを残す山崎カールを見ながら夏道の尾根を登る。頂上から、だだっ広い内蔵助谷の上部カールに滑り込む。その内、沢も狭くなり、デブリの散乱する沢を重荷に苦労しながら内蔵助平へ滑り込んだ。ハシゴ谷を越えてシールでつめ、夏道沿いに尾根を1つ越え、湿雪の沢を剣沢へ向けて滑る。真砂沢ロッヂ附近はテント村といった感じであった。1760m対岸の台地上で、4月末より入山していた遠山パーティの出迎えを受ける。ここで作野氏のアクシデントの事を聞き、へりて富山市民病院に入院した事を知る。

タイム：大町<sup>5:15</sup>→室堂<sup>8:30</sup> / 9:00 →  
真砂岳<sup>12:00</sup> / 12:35 → 内蔵助平<sup>14:05</sup> / 14:  
20 → ハシゴ谷を越え<sup>15:15</sup> / 15:45 → 真砂沢  
ロッヂ附近<sup>16:30</sup>



5月4日

急遽下山する事になった遠山パーティは早朝4時頃出発してゆく。後巻パーティは気乗り薄の菅沼しが残り、他は長次郎谷に向う。ハッ峰と源次郎尾根に狭まれた長次郎谷はアルペングルード一杯だ。今日も快晴で、照り返しひどいような沢の中を、やたら長い休みをとりながら登る。コルに着く頃には脇の沢から小さな湿雪雪崩や、小さな避難小屋程もあるようなブロックが落ちて長次郎谷のノドの辺りを流れてゆく。スキーをつけ下り始めるが、登りの足跡やシリセードの溝、そして暑さでグサグサになった雪は仲々辛い。手塚さんによれば過去最悪の雪質との事。ノドの所は左岸の尾根から避けて本流に滑り込む。デブリで脚がカッタルくなるが、雪質の良さそう？な所を拾いながらテント場まで滑る。一人残った菅沼氏は結局、小窓雪渓を滑って来た。

タイム：テント場<sup>6:45</sup>→途中休憩 95分  
→ コル<sup>2830m</sup> 1:20 / 12:00 → 長次郎谷出合<sup>13:20</sup> / 13:30 → テント場<sup>13:35</sup>

5月5日

前日の菅沼氏の詰から、今日は先ず小窓雪渓に向う事になった。近藤岩までスキーダラリ、狭くて両側から所々ブロックやデブリの散乱する北股を過ぎると、沢の中ごと開け、真白？な雪面が広がる小窓雪渓に出た。前日の菅沼氏のシュプロールから斜面とのんびり登る。コルから西仙人谷側は、ちよつと滑れそうもない感じだ。小窓雪渓 出合まで広い斜面を快適に下る。ここから三ノ窓雪渓に向う石垣氏と別れ、仙人谷に登る事にする。池の平小屋まではちよつと奥利根源流を思かせる雪原といった感じで長次郎谷等とは対照的である。当初の予定だった小黒谷へ大窓雪渓出合までは充分滑れそうだ。大窓への斜面に取りついた登山者も豆粒のようだ。この頃から上空にかなり雲が出始めて来た。仙人谷からは広い斜面を各自思いのままに滑る。

悪雪などものとせず

葛田 菅沼

西川 手塚



三ノ窓雪渓出合に着くと、三ノ窓のコル手前の急斜面でがんばって登っているのが、どうも石垣ぐらしだ。コルから12分ほど降りてきたのはさすが。テント場に帰り着くと、まわりのテントは殆んど撤収されていてびっくりした。夕食後20:00頃より暴風雨となる。そのうちドームテントのフライは壊れて飛ばされ、ツェルトは何度もポールが倒され、深く差込んだペグ替りのスキーモニュメントが飛ばされる始末で、一睡も出来ないうち、結局2:30頃ツェルトを撤収して、水浸しのドームテントに逃げ込む。

タイム：テント場<sup>6:30</sup>→迎藤岩<sup>6:50</sup> / 7:  
:00 → 小窓コル<sup>8:50</sup> / 9:50 → 出合(1800m)  
10:18 / 10:55 → 仙人山<sup>11:50</sup> / 12:25 → 三  
窓雪渓出合<sup>12:55</sup> / 14:15 → テント場<sup>15:00</sup>

——人三，窓雪渓を滑る（石垣記）

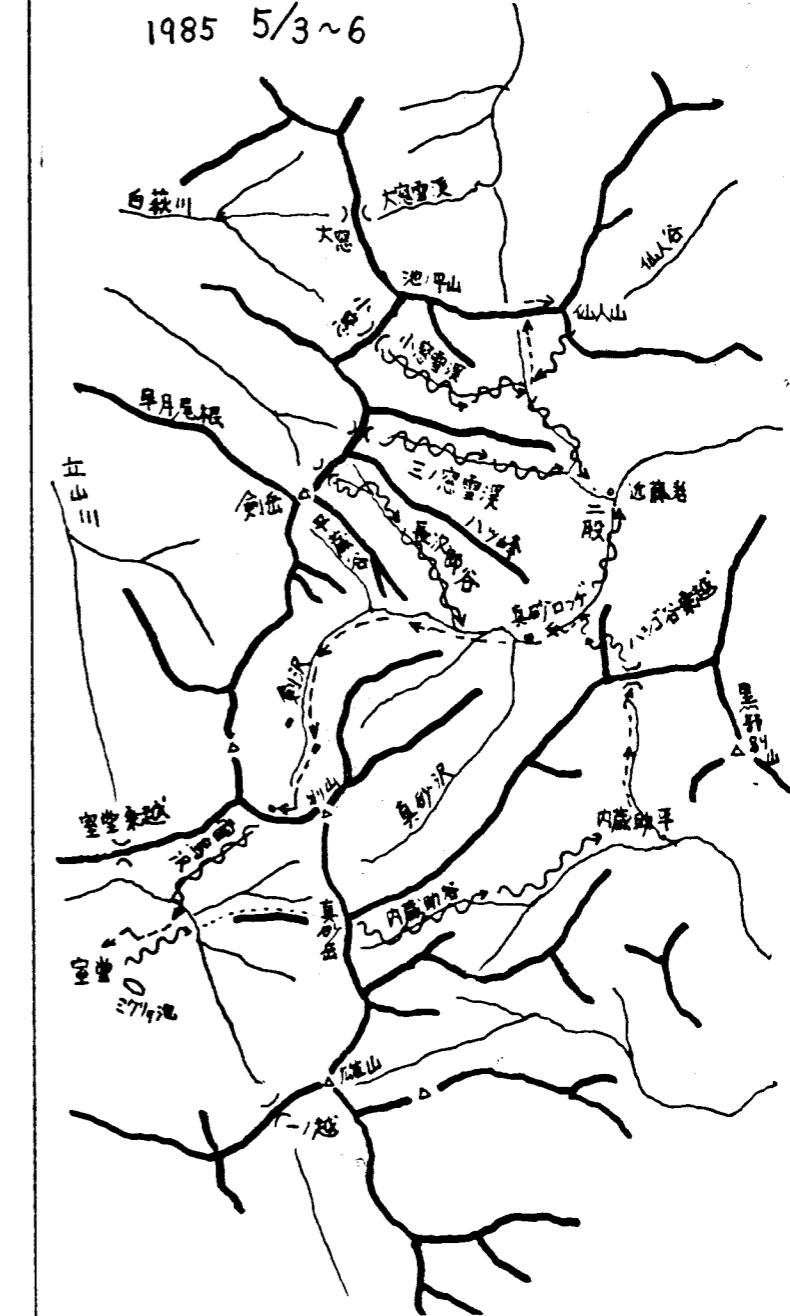
池ノ平へ向かうパーティと分かれ、三、窓をめざす。三ノ窓雪堀は、いたるところデブリに覆われ、比較的平坦な箇所を選んでスキー登行。ノンスリップパターン(ソールがうろこ状)の登攀性能は、ここではシールの半分程度。トラバースに近い斜嚮行とキックターンの单调な繰り返し。ときおり、ハツ峰上部で起きたなだれが、岩壁に達し、壇となって落下、谷に大音響をとどろかせる。中間部2000m付近で、谷はひろがりをみせ、雪面は両側面に及ぶ、そしてそこからの新しいデブリが整然と連なり、突然ズルズルと動き出す、まるで生きもののようだ。ノドの手前でスキーをはずし、蹟跡をたどる、かなりの急勾配、再び

上部が開け、傾斜が弱まるとコレに達する。待ち合わせの時刻が迫っているため、5分ほど休憩しただけで、滑降にヒリかかる。緩斜面をスムーズにこなし、ノドにさしかかると、シュピールが引き金となり、ズルズルなだれが生じる。突き切ることを考えたが、場所が場所なのでしばしちゅうちよ。あさまりかけたところで、わきをすり抜けるように滑降。広い斜面に出る。あとでデブリの間をぬうように小きさみなターン。デブリ自体も軟骨なので、ジャンプターンによる方向転換は可能。パワーが必要な滑りで、足が疲れ怠つかい、毛荒くなる。ときどき小休止して息を整え、ルートを定める。20分で出合に達し、パーティーと合流する。デブリのおかけで、変化に富んだスリルあふれるキーを楽しめた。

5月6日

明るくなるのを待つて剣沢より剣御前小屋まで下山する事になった。全装備がズブヌレで、とてももう一泊する気にはならない。(その時間も無いのだが) 風雨の中、テントを撤収し出発する。武藏谷出合辺りから、また風雨が強まり、ビショヌレの体には、かなりこたえる。時折の突風で立止まる程である。途中、剣沢小屋で休憩する。視界が悪い為か、剣御前小屋への踏跡も、かなり別山寄りについでいて余分なトラバースをさせられた。やっと小屋に飛込んで暖かいラーメンで元気をつける。もうここまでくれば、雷鳥沢を下るだけである。濡れて重くなったザックを背に、ひたすら滑

1985 5/3~6



室堂への登り返しから雨に煙る室堂タ  
ーミナルに着いた時は思わずバンザイ。  
あわただしく荷物をまとめて美女平行きの  
バスに乗り込む。富山からは連休最終日で混  
雑する電車に、立ち、放して帰京する。

714: テント場 5:30 → 剣沢小屋 8:10 /  
9:35 → 剣御前小屋 10:30 / 11:30 → 室堂  
13:00 (小森宮記)